

第1章

人々を取り巻く自然と資源

私たちはしばしば、メコン河流域の人々の暮らしを語る時、「メコン圏の生活はその自然資源に依存している」と言います。しかし、日本で暮らす私たちが、身の回りの自然資源を利用している人々の暮らしを想像するのは至難の業です。また、「自然資源」と聞いてすぐ具体的なモノを思い浮かべることすら難しいと思われま

す。
ここでは「自然資源」を、地域で暮らす人々が食料や生活用品として利用するものを指すこととします。私たちがなぜメコン河流域での開発とその自然資源への影響を問題とするのか、より理解していただけるように、メコン河流域で人々が自然からどのような食べ物や生活に必要なものを取り出しているか、ラオスやカンボジア、タイの事例でご紹介していきます。

1. 川の魚と人々



タイやラオスでは、「水あるところに魚あり」といわれるほど魚は身近な生き物であり、重要な食料です。メコン河流域では1,200種もの魚が生息していると言われていたのですが、その生活のサイクルや行動が詳しく分かっているものはほとんどありません。最近になってメコン河に棲む魚の70%近くが本流や支流の中を回遊していることなどが分かってきました。

人は陸上の生物ですから、水中にいる魚を獲るためには、様々な工夫や知識が必要となってきます。人々は水位の変化や季節の変わり目に、魚がどのように行動するか知恵を蓄えてきました。また、魚を食べるための工夫も様々です。暑い気候で魚を保存するために発酵が用いられているなど、日本でも見られる食品保存の知恵があり、ラオス南部やタイの東北部では、主食のもち米と合う様々な料理が伝えられています。

このような資源利用は、ダム開発の影響を直接受けます。ダムが川の環境を変化させるため、魚の生態に大きな影響を与えるからです。メコン河流域の支流に今まで作られたいくつものダムのある川では、魚類層の変化や魚類の減少が起り、人々の生活を変えてしまいました。

■ムン川と漁師

東北タイで一番大きなメコンの支流、ムン川では河川での漁業が非常に盛んな場所でした。人々は魚についていろいろなことを知っています。また、川の中の地形や水の流れ具合には独自の呼び名がありました。ある調査では、地元の人々は川の中の地形を20以上に分類していたことが分かりました。また、私たちの調査では更に、川の中の岩や淵に名前が付けられていることが分かっています。例えば、サベン淵（サベンと呼ばれる木が川岸にたっていた）のように、目印となる樹木や岩が淵や瀬と結びついて地名として人々に認識されています。サベン淵は、そのまま村の名前にもなっています。変わったところでは、グッガークの洞（穴に水が出入りする際、グッガークと音をたてたのでその音が名前となった）、鶏の引っ掻き早瀬（大きな鶏が土を引っ掻いたように、傷がついている岩がある早瀬）などもあります。

調査でお世話になっていたサワイさんは、50年近くムン川で漁をして、薬草の知識もある物知りとして村で一目置かれた存在です。私たちと彼は、ムン川に建設されたパクムンダムの反対運動の中で知り合いました。パクムンダムが建設されたことで、人々が持つこのような知恵は生活の中で生かされることが少なくなってきました。ダムが河川の環境を変えてしまい漁業資源が激減したためです。サワイさんはそれでも、息子や婿たちに自分の技術や知恵を伝えていこうとし、私たちにも川の自然にまつわる様々なことを教えてくれています。

◆サワイさんの魚を獲る智恵

水が早く流れるところは横型のロープという漁具、そうでないところは、縦型のロープを仕掛ける。人々がブンと呼ぶ、水がうなって巻いているようなところや、岸边に近い場所を魚は好んで通る。水が渦巻くようなところには、チャンという漁具を仕掛ける。そういう場所は、魚が遊びに来るのさ。魚は行ったり来たりして、チャンにかかる。漁具を仕掛ける場所を選ぶのはとても難しい。支柱の立てられる場所でも、岩の位置関係などを見定めないとね。



漁具の説明をするサワイさん

流れが速い場所には大きな魚が集まる。大きな魚は岩に沿ってやってくる。魚は川岸近くでいろいろ食べながら来る。岸近くには小さなエビなどが集まるから。大きな魚はタムと呼ばれる洞（ホラ）にいるよ。洞は深いクウム（淵）の中にある。パー・クウン、パー・トンガーイといった魚がタムを好む。村の近くにはパー・トン淵があった。この魚が多かったからそう呼ばれるようになったのだろう。

漁具を仕掛ける場所はルアンと呼ぶ。ルアンを作る際、まず見るのは水の速さだ。そして、岩の状態で魚がくる場所かどうかを見極める。良いと思ったら、岩と岩の間などに試しに仕掛けてみる。そのルアンが使えるかどうかは、一晩で分かるものだ。夕方仕掛け、次の日の朝に見に行くと、魚が漁具に入っていればそこは当たりだ。はずれだったら、何日待っても魚は入らないのさ。

ヴァンと呼ばれる水が巻くように流れる淵を好む魚はパー・ブン、パー・スワイだ。早瀬には、エビやパー・イトウ、パー・トンといった魚がいる。水面から近いところにいる魚は、パー・ナン、パー・シーナムガン、パー・パークだね。深いところにいるのは、パー・ケーだ。パー・ケーは早瀬の岩にくっついていて止水は嫌いで、流れているところを好む。岩がないと、そこにはいない。カンと呼ばれる平瀬の頭（上流）の深くも浅くも無いところによくいたな。昔は釣り針にミミズをつけて1匹2-3キロになるものがとれた。とてもたくさんいた。ダムができてから大きなものは消えてしまったよ。卵を持つのはパー・クウンと同じ時期で、洞で産卵して、自分の卵を見張るようだ。パー・トンも同様だ。この種は雨季に浸水林で産卵する。

トゥム・ラーンという漁具は（この村の周辺では）6-8mの水深の緩い流れに仕掛ける。餌の糠を漁具の底につける。水が早いとそれが流されてしまうから。この漁具にかかるパー・スワイ、パー・イカムはタオと呼ばれる藻を食べる。トゥム・ラーンで獲れるのは、岩場にいる魚だな。河床が泥だとエサの糠が泥をかぶって見えない。魚も餌を見ているのさ。

■メコン河や支流の魚

魚はラオスや東北タイでパーと呼ばれます。ムン川の下流域では2001年に行われたある調査で人々が130種類以上に魚を分類していることが分かっています。



パー・イトウ



パー・クウン



パー・トンガーイ



パー・ナン

■漁具：自然資源を取り出す知恵



ロープ：この漁具は主に雨季の5－8月に使用されています。仕掛ける場所は、川岸近くで雨季に冠水した樹木があるような流れのある場所が好まれます。竹などでフェンスを作り魚を誘導する方法と、水中に立てた竹の支柱に結びつけフェンスを作らない場合があります。ムン川下流域でのこの漁の作業時間は、朝5時ごろと夕方5時から6時の一日2回です。



トゥム・ラン：この漁具は河床に置くように仕掛けます。場所は流れが緩やかで底質が岩、水深はおおよそ3－10mといったところです。1日2－3回引き上げて中の魚を出し、エサを入れなおし水中に戻すことを繰り返します。漁具を水から引き上げるときは素早く引き上げなければなりません。ゆっくりであると口が水中で開き、俊敏な魚であればその際に逃げ出してしまふからです。従来は竹を素材としていましたが、最近では底部をプラスチック、枠を針金にし、竹で編んでいた側面には化繊の網を用いることが増えてきました。



チャン：落としぶたのついた漁具で、中に入り込んだ魚が張り渡してある細い縄にぶつかると、ふたが落ちる仕掛けです。魚をおびき寄せる餌は入れません。流れの比較的早い、岸に近い場所に置かれます。この漁具の仕掛けられる場所は、ムン川下流域ではルアンと呼ばれ、ある特定の家族が占有することが村の中で決まっています。この利用は先着順で決まっています。もしルアンを持っている家族がその年利用しなければ、ほかの人でも使うことはできますが、その時は必ず断らなければなりません。その場所を使わせてもらうことで、謝礼を払うか否かはその両者の関係によります。

■魚を食べる

人々は様々な調理方法で魚を食べます。また、発酵を利用した保存方法も編み出されてきました。ここでは代表的なものをいくつかご紹介します。

【ウー】

材料は小魚、または魚の切り身、レモングラス、唐辛子、パデーク（魚の発酵食品、後述）、バイ・イトゥ、パック・カジェンと呼ばれるハーブ。これらを混ぜて、魚と調味料に少量の水を加え鍋で煮る。



【モック】

材料はウーと同様、魚と調味料に少量の水を加え鍋で煮た後、水がなくなり魚に火が通ったらバナナの葉に包み、蒸す。



【ボン】

小魚、または魚の切り身、唐辛子、パデーク（魚の発酵食品）、トンホーム（浅葱）をまぜ、魚を唐辛子とパデークを入れた水で煮て、魚の骨から身をそぎ落とし、クロック（石のすり鉢）で搗く。魚を煮た水に戻し、浅葱、紫玉ネギ、パクチーを細かく刻んで入れ、ナンプラー、パデーク、塩で味を調える。



【ラーブ】

材料は魚、塩、ライム、紫玉ネギ、米（炒ったもの）、浅葱、粉唐辛子、パデーク、ナンプラー。魚をたたきにして塩を混ぜ、パデークを入れ、加熱する。火からおろし、紫玉ネギ、炒った米、粉唐辛子、浅葱を入れライムで味付けする。



【トム】

材料は魚、塩、レモングラス、カー（シヨウガの仲間）、タマリンドの葉や数種類のハーブ、粉唐辛子、パデーク、ナンプラーなど。水を沸騰させ、カーとレモングラス、タマリンドの葉をいれる。魚を煮て塩とナンプラー、ハーブで味を調える。酸味がある。





【パー・デーク（パデーク）】

材料は魚、糠、塩。魚を洗い、内臓を出し、塩と糠（または炒った粉）を混ぜ、一日漬けておく。壺に入れ発酵させる。約3ヵ月後から食べられるが通常、半年から1年おく。



【干物】

魚の内臓を取り、開きにして天日で干す。商品価値をつけるため小さな魚は、7-8匹の尾を付けて円形にまとめその形のまま干すこともある。



【ソム・パー】

日本のナレ鯨と似ている。材料は魚、ニンニク、塩、炊いたもち米。魚の内臓を取り、切り込みを入れて塩水に半時間ほど漬けた後、塩を混ぜる。炊いたもち米をさらに水でふやかし、刻んだニンニク、塩、魚と混ぜる。手で揉み魚の骨を折りながら、塩を魚にしみこませる。その後、瓶や壺にいれ数日発酵させる。焼いたり揚げたりして食べる。

■パクムンダム



1994年、ムン川とメコン河の合流点から約5キロメートルの場所に作られた発電用のダムです。魚の回遊を阻害したため川の漁業資源が激減し、地域から強い反発が巻き起こりました。ムン川の河口近くでは、農業適地が少なく多くの住民が川での漁業で生活していたためです。十数年に渡りダムの影響緩和や正当な補償を求めてきた住民は、1999年からダムの撤去を要求しています。現在、タイ政府も住民の主張を一部認め、ダムの水門は年間4か月間開放され、魚への影響緩和が図られるようになりました。ダムの運営を巡る住民と政府の交渉は、今も続いています。



ダムの水門が閉鎖されると、川の流れは止まってしまいます。しかし、発電をする際には水が流れるため、水位は一日のうちに何度か上下します。そのため、河岸は崩落してしまうのです。人々は河岸を様々なように利用しているため、ダムがもたらす地域への影響として問題視されたのです。

写真左上、水門を閉じたパクムンダム上流から、左下、同下流から。右上は崩落した河岸。



■多彩な河川利用：河岸の菜園

人々にとって川は、水が流れるところだけを指す訳ではありません。メコン河流域では、モンスーンの影響で雨季と乾季が明確です。地表の水環境は大きく変化しますが、最も大きな変化を見せるのが河川です。場所によっては十数メートルの差が生まれるため、水位の下がる乾季には河岸を利用した菜園作りが広く行われています。この畑は、毎年川が肥沃な土壌を雨季の間に新しく運んでくるので、施肥の必要がほとんどありません。また、乾季の厳しい乾燥時にも川が目の前にあるため、水の心配をしなくてもよいのです。川の沿岸に住む人々は、このような河岸の土地を慣習的に村の中で分配・相続し、代々子孫に伝えてきました。

2. 耕し、食べるための森



11月。収穫の季節。
カムの人々は稲穂を刈り取るのではなく、籾のみを収穫する

■ラオスの焼畑： 畑でも森でもある場所

米を作る場所として、日本人がまず思い浮かべるのは水田—水を張った空間に、整然と並んだ緑の稲—ではないでしょうか。ラオスにももちろん水田がありますが、米は水田だけでなく焼畑でも生産されています。焼畑では陸稲が作られているのです。

この焼畑、しばしば森林破壊の元凶といわれています。確かに、広い面積を必要とし、毎年移動して森を焼くことは、当然木を切ることを伴います。ラオスの人々は焼畑を何百年も前から続けていますが、戦乱が終わって人口が増加し、耕地面積は拡大傾向にあることは事実です。一方で、ラオスで

本格的な木材の商業伐採が始まったのは1980年代以降。森林の減少が問題視されるようになってきたのは、1990年以降です。こういった流れを見れば、焼畑がラオスの森林減少の唯一の原因ではないことが想像できるのではないのでしょうか。

しかし、ラオス政府は2010年までに焼畑を全て禁止するという政策をとっています。これは、焼畑で生計を立てている人々の生活に少なからぬ影響を与えています。焼畑が行われているのは主に山岳地帯で、水田の適地がないことが多いのです。逆に言えば、人々はその場の自然環境にあった農業を行ってきたともいえるでしょう。焼畑の功罪を問うことは重い課題で、ここで論じられるものではありませんが、焼畑それ自体について私たちがほとんど何も知らないというこ



2月から3月。火入れを前に伐採を行い、乾燥させる（上） 3月に行われる火入れ（下）



とを、まずは問題にしておきたいと思います。

メコン・ウォッチの調査地、ラオス北部のウドムサイ県の山岳部にあるカム民族の村では、人々は焼畑による陸稲の栽培を生業としています。ここでは、平均7～8年前に焼畑に利用した二次林を伐採し、火を入れ陸稲を植えるということを繰り返しています。一度収穫を終えると、その焼畑であった場所は数年間放置されることになり、1年も経てば背の高さほどの草が生い茂ってきます。やがてそこではタケノコなどがとれるようになります。収穫から7～8年が経ちある程度植生が回復すると、そこが再び新たな農地に選ばれるのです。

人々は、木々が生い茂る「森林」と陸稲が植えられている「農地」を、あまり明確に区別していません。焼畑では、

米だけでなく豆類や野菜なども作られます。ラオス語で焼畑地は「ハイ」、焼畑の二次林は「パーラオ」と呼びます。「パー」とは「森」を意味しています。もし「パーラオ」を十数年以上放置することがあれば、それはやがて「パーケー」（年を取った森）になっていくのです。そして時期が来れば「パー」（森）を切り開き、そこがその年の「ハイ」（焼畑地）になる。焼畑は、水田や常畑とは異なり、森とその再生のサイクルの中に組み込まれるようにして成り立つ農業なのです。人々は焼畑で、森と畑の間ともいえる状態の土地利用を行っています。



7月。青々と育った稲



3月。村では伐採に使う鎌の手入れが行われていた



7月。雑草刈りの時期。
村人にとっては焼畑の一番大変な作業



11月。収穫の季節



刈入れを待つ稲穂（上）、収穫風景（下）

■食べられる森：非木材林産物の利用

ラオスやタイでは、花がしばしば食卓にのぼります。特に、よく見るのはバナナの花です。パパイヤサラダの付け合わせなど、生で食べることの多い食材です。ラオスの村では野生のものがよく食されています。また、代表的な食材は、タケノコです。ラオス全土で盛んに採取がおこなわれており、焼畑の休閑地や村の周りに残した竹ヤブ、森の中などで採取されています。また、森では植物だけでなく、動物や昆虫も採取されて、食材として利用されています。



バナナの花（左上）

「スップバック」というラオス料理は森でとった野草や木の芽などの材料から作られている（左中）

「ボック」という木の実、食用（左下）

市場で売られている木の花（右上）

「ボック」の木（右下）





キノコはタケノコと並ぶ雨季の重要な食料
 (左上、左中、左下、右上)
 市でコオロギを売る女性たち。昆虫も林産物の一つ (右下)



古くからの森の使い方と新しい利用

ラオスの人々は森と共に暮らしてきた、と言われています。

しかし、今、そのやり方は外からの働きかけによって大きく変わりつつあります。



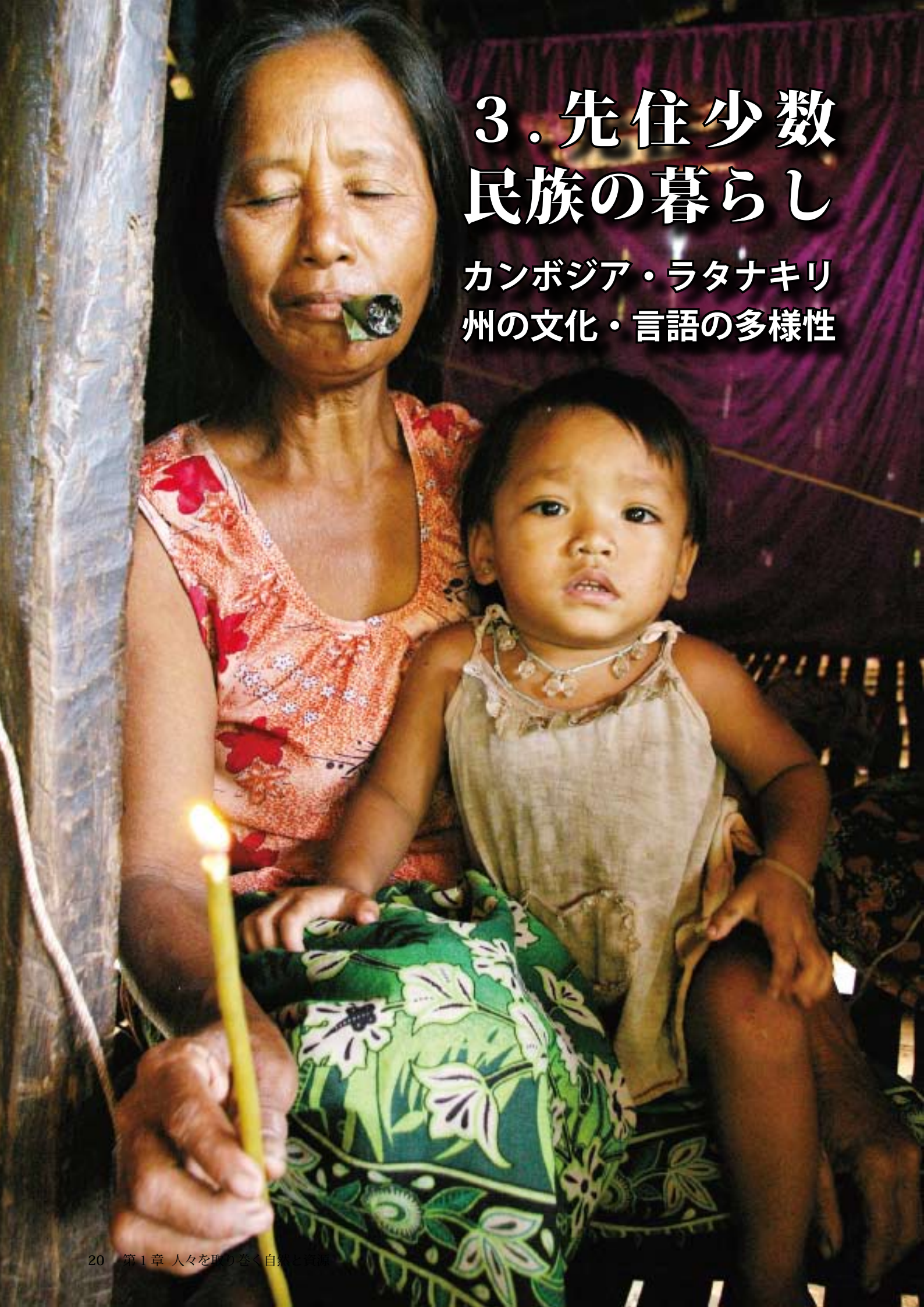
フタバガキ科の樹木から樹液を採取する女性（上）、タケノコ採取に出かけた子供たちと籠の中身（下左）
ツムギアリを採取する人々（下右）





森でしばしばすれ違う伐採した木を運ぶ車（上）、樹液をしみこませて作った松明（下段左上）
森の中を歩いて採ってくるものは多彩（下段左下）、植林のため焼かれる林（下段右上）、ゴム植林地（下段右下）



A photograph of an elderly woman with a leaf in her mouth, holding a young child. The woman is wearing a red floral patterned top and a green floral patterned skirt. The child is wearing a light-colored sleeveless top and a necklace. The woman is holding a lit candle in her right hand. The background is dark with a purple fabric hanging.

3. 先住少数 民族の暮らし

カンボジア・ラタナキリ
州の文化・言語の多様性

■はじめに

国内外でのダム開発に揺れるカンボジア東北部には、どのような人びとが住み、どのような生活を営んでいるのでしょうか。ラタナキリ州に住む先住少数民族の生活を通して、その様子を垣間見てみましょう。先住少数民族の織りなす生活がラタナキリ州に文化や言語の多様性をもたらし、同時にその多様性にとって、先住少数民族を取り巻く自然環境がかけがえのないものである点に少しでも光が当たればと思います。

■ラタナキリ州の先住少数民族

カンボジア東北部に位置するラタナキリ州には、14ほどの民族が住んでいます。この中には、カンボジア人口の大半を占めるクメール人や、ラオ族、チャム族、華人、ベトナム人といった人びとに交じって、「先住少数民族」と呼ばれる人びとが生活しています。クメール人やベトナム人がやって来るはるか以前から、この地で生活してきたとの意味が込められています。

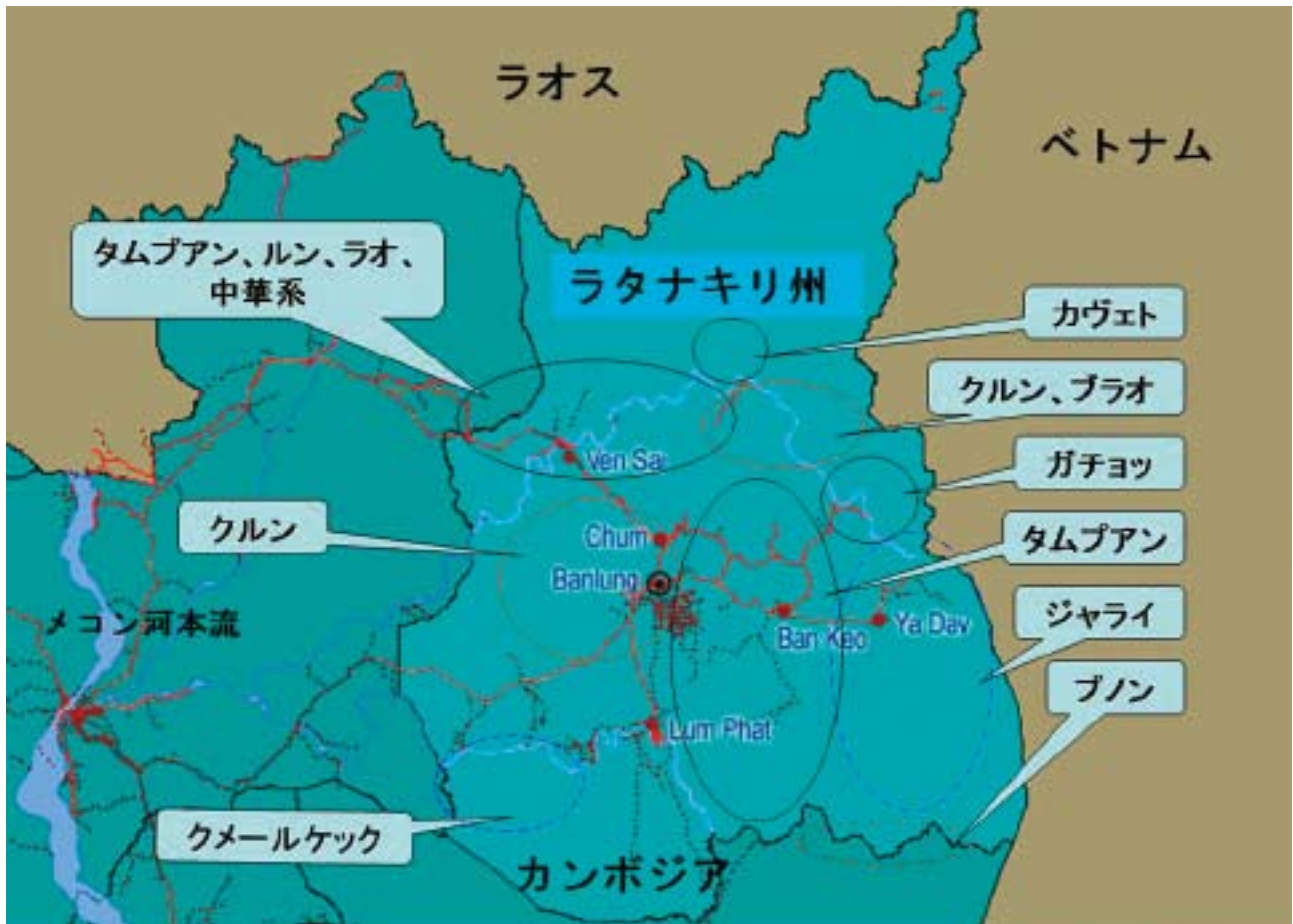
先住少数民族はカンボジア各地に住み、その数は、カンボジアの全人口（約1,400万人）の中でほんの10万人ほどです（注1）。ところが、ラタナキリ州は、南隣のモンドルキリ州とならんで、先住少数民族の人びとの数がひときわ多く、2003年頃の人口調査では、州人口114,451人に対して80,337人（約70%）に達していました（注2）。

ラタナキリ州に住む主な民族を居住地にしたがって並べてみましょう。州の東部では、北から順番に、カヴェト、クルン、ブラオ、ガチョット、タムプアン、ジャライ、プノンの各民族が住み、西方では、やはり北から、タムプアン、ルン、ラオ、華人、クルン、クメールケックの人びとが集中的に居住しています。タムプアンとクルンには大きな生活圏が二ヶ所あり、住む場所によ

Meach Mean 氏（3S Protection Network）が2008年11月にタイのMahidol University at Salaya、Institute of Language and Culture for Rural Developmentで行った講義と氏へのインタビューをもとに、土井利幸（メコン・ウォッチ）がまとめた。「川辺に自生する薬草を摘む女性」の写真はCindy Godden氏による。残りの写真はすべて3S Protection Network提供。



写真上から：クルン族の女性、森で集めた薪を運ぶブラオ族の女性、ジャライ族の女性・子どもたち



て違いが生じてきています。例えば、東部に住むタムプアンの人びとが誰かに「お出かけですか？」と尋ねる時には、「ラムパチャム」と言うのに対して、ラオ族の影響を強く受けた西部のタムプアン族は「ラムパチャー」と言います。ことばの違いが大きくて、同じタムプアンでありながら、通じ合えないこともあります。一方で、カヴェト、クルン、ブラオ、ルンの人びとは、自分たちのことばで話しても理解し合うことができます。さらに、ジャライやプノンでは、国境を越えてベトナム中部にも同じ民族が住んでいます。ブラオとカヴェトの場合は、ラオス南部にも居住地があります。

上にあげた民族のうち、ラオ族、華人、クメールケックは先住少数民族ではありません。クメールケックは、ラオ族から強い影響を受けて、ラオス語を取り混ぜたクメール語を話します。例えば、「ミーネアン・パイ・ダエンバイ・ダム・トゥック・オーイ・ヴィア・ギン・ポーン・

ティー」はクメールケックのことばで、「(親が娘に向かって) あの人に水を飲ませてあげなさい」という意味ですが、「パイ」(「行く」) や「ギン」(「飲む」) はラオス語の単語です。

先住少数民族のことを初めて聞く人にとっては、非常に複雑に感じられるでしょうが、ラタナキリ州の多様性とは、単に民族がたくさん住んでいるというだけではなく、同じ民族の中にも違いが存在するし、違った民族が交わる中で、さらに新しいものが生まれてくるなど、いろいろな側面を持っています。

表1に、主な民族についてまとめてみました。人口については、それぞれの民族語を話す人の数をもとに、ラタナキリ州と、先住少数民族が多く居住する東北部の他の3州(モンドルキリ、ストゥントレン、グラティエ)との合計の両方を示しました。

表1 ラタナキリ州の民族・人口・言語系統（注3）

民族名（ローマ字表記）	人口		言語系統
	ラタナキリ州	4州合計	
ガチョツ（Kaco'）	2,054	2,056	モン・クメール
カヴェト（Kravet）	1,726	3,931	モン・クメール
クメールケック（Khmer Khek）	1,600	不明	モン・クメール？
クルン（Krueng）	14,877	15,041	モン・クメール
ジャライ（Jarai）	15,669	15,801	マレー・ポリネシア
タムプアン（Tampuan）	22,128	22,211	モン・クメール
ブラオ（Brao）	7,132	7,353	モン・クメール
プノン（Phnong）	367	21,957	モン・クメール
ルン（Lun）	0	273	モン・クメール

■精霊信仰

カンボジア東北部の先住少数民族は、山、森、木々、滝、水、早瀬、村、家屋、動物など森羅万象に精霊が宿っていると考えます。精霊には目に見え、音に聞こえるものもあり、それぞれに名前を持っています。精霊への信仰は、精霊の住む森の木を切らない、外部の者の

村への訪問を制限するといった禁忌（タブー）や、夢見が悪いとか、家族が病気になった際にお供えをするといった儀式的形をとることがあります。

精霊が何に宿っているかは個人的な体験で明らかになることもあります。例えば、誰かに追われて竹やぶに逃げ込んで命拾いをすれば、それは竹やぶの精霊が守ってくれたからです。また、鳥の鳴き声で害をなす兵隊



写真上から：ルン、タムプアン、ラオ、クメールケックらの間で見られる精霊の森の祠（ほこら）。精霊の森に建ったタムプアン族の墓地。下：精霊のための儀式的の様子。左は精霊にカラバオを捧げる前の儀式でジャライやタムプアンの間で見られる様式



上から：川辺に自生する葉草を摘む女性。農作業の様子。小ぶりの魚は塩漬け・発酵してのちペースト状の「ブラホック」になり、そのまま食べるほか、たくさんの料理に欠かせない調味料となる。食卓にならぶごはんとおかず



がやって来たことを知ったとすれば、それは野生の鳥に宿る精霊が助けてくれたのです。こうした信仰を持つ先住少数民族の人びとにとって、森林伐採やダム建設で精霊の住処を踏みじめることは、ブルドーザーで神社仏閣をなぎ倒すこと以上に、恐れを知らない行為として映るでしょう（注4）。

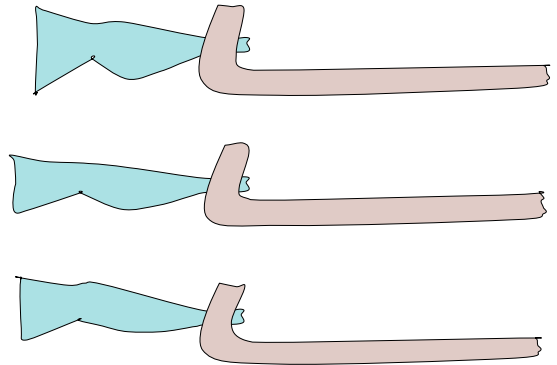
■焼畑、漁業、非木材林産物

先住少数民族の生活と文化は、米の生産や森林での採集活動と切り離せません。ほとんどの人びとがなんらかの形態で焼畑農業に従事しています。伝統的には1区画の土地を1年から3年使って次のところに移動し、10年から15年の周期で元の土地に戻って来ていました。しかし、最近では人口の増加に伴い、1家族が5ヘクタールほどの土地を持ち、そのうち1ヘクタールほどで米を育て、翌年にはすでに別の土地に移るといったやり方が増えています。焼畑を行う土地の選定などの際にも、精霊のお告げや儀式が重要な意味を持ちます（注5）。主食である「米」に当たることばも民族によってさまざまです。ガチョは「ハバ」、カヴェトとブラオでは「オック」、クルンが「ポル」、タムプアンは長く伸ばして「ポール」、ジャライなら「ソイ」、プノンで「ペアン」と言います。

■道具の伝統

右の写真は、ラタナキリ州のすべての先住少数民族が「グディアウ」と呼ぶ道具で、田の雑草を刈る時に使います。柄の部分は竹でできています。一方で、同じ用途の道具でも、呼称はもちろん、民族間で微妙に形の違う場合があります。右の図は、すべて木を切る道具ですが、上は、カベット族のことで「パガイ」、真ん中は、ジャライで「ガク」、ガチョットとタムプアンで「ハガイ」、下は、ブラオ、クルン、ルンの人びとの間で「パガク」と呼ばれています。

先住少数民族は自分たちで掘った井戸を使い、そこで飲料水や調理用の水をひょうたんに詰めて家まで運びます。ひょうたんは数がたくさんになるので、入れて背負う籠が必要です。左下の写真はクルン族が使う籠で、右がルン族のものですが、この場合、形状は違っていても、同じ「リアウ」という名前と呼ばれます。



左上：水を汲む女たち 左下：クルン族が「リアウ」と呼ぶ籠 右：ルン族が「リアウ」と呼ぶ籠

■共同体

先住少数民族の間では、10世帯あまりもの家族が一軒の家で共同生活をする場合があります。外から長屋に見える家は、実は内側で個室に仕切られています。男性は一定の年齢（10才）に達すると、家の真ん中や村の中央に集まって生活をします。クルン、ブラオ、ルンの場合は、木の上など高い場所に住処を築き、男性はそこで、たいていの場合独りで、寝泊りします。そうした生活をしながら別のところに家を建て、やがて伴侶となる女性を迎える準備をします。



上：カヴェトの家、下：ガチョッ、ジャライ、タンプアンの家

国内外から押し寄せる開発の波、とりわけ大型ダムの建設によって、ラタナキリ州に住む先住少数民族の人びとはたいへんな被害を体験するとともに、将来への大きな不安に直面しています（注6）。ダムは先住少数民族が生活の礎（いしずえ）としている川や森をだいなしにしてしまいます。伐採や貯水によって、精霊の住む森、流れ、淵は水没・消滅し、立退きによって、共同生活をしていた家族や親戚が離散してしまうこともあります。これは先住少数民族が連綿と培ってきた多様性の破壊にほかなりません。

先住少数民族も嘆き手をこまねいているわけではありません。民族同士、村と村、NGOとの間をつなぐネットワークを作るなど、危機に対応する努力を続けています。しかし、森や川や魚については科学者すら舌を巻く知識や経験を持つ先住少数民族も、近代的な教育を受けた人は非常に少なく、国語であるクメール語の読み書きのできる人も一つの村に数人しかいません。男女間にも格差があって、村の外で開催する会議に集まるのは圧倒的に男性です。いろいろな決定を下す時にも男性の方が力を持っています。外から持ち込まれる大型開発に対抗するには、もっとみんなが参加できる仕組みを作っていかなければなりません。

■おわりに

ラタナキリ州の先住少数民族の人びとは、開発や進歩をあたまから否定しているわけではありません。心ある人びとの誰もがそうであるように、自分たちや将来の世代のためになる開発を望んでいるのです。ただ、本当の開発は、これまで大切にしてきた文化や伝統と折り合いをつけながら、徐々に進めてゆくものでなければなりません。外部から、一方的に、十分な情報も公開せず、気持ちや意見を表明する機会を設けるでもなく、書類を出したと思ったらちんぷんかんぷんの英語というのでは、開発の名前にあたいしません。こうした強引で傲慢な「開発」は、たいていの場合、先住少数民族が持っている知識や文化や伝統や言語、そしてそれらと周囲の自然環境との密接なつながりを軽視・無視するところから出発します。そうした出発点自体が間違いであると気づくことが大切だと思います。



上：村の集会場に集まるブラオ族の女たち 下：村の外での会議の様子。出席者の大半が男たち

注

- 1) Gordon, Raymond G., Jr. (ed.) 2005. Ethnologue: Languages of the World, 15th edition. Dallas, Texas: SIL International. <http://www.ethnologue.com/>
- 2) Hubbel, Dave. 2007. Indigenous People and Development in Northeastern Cambodia. Watershed 12.2. 33-42.
- 3) Asian Development Bank (ADB). 2002. Indigenous Peoples/Ethnic Minorities and Poverty Reduction, Cambodia. Manila, Philippines: ADB. http://www.adb.org/Documents/Reports/Indigenous_Peoples/CAM/indigenous_cam.pdf
- 4) Colm, Sara. 2000. Forests of the Spirits: Impacts of the Hero Logging Concession on the Indigenous Culture of the Kreung. Watershed 6.1. 32-41.
- 5) Watershed. 1999. Times of Change: Swidden Cultivation in Policy and Practice. Watershed 5.1. 9-22.
- 6) 杉田玲奈（著）、メコン・ウォッチ（編）2008.『水の声 ダムが脅かす村びとのいのちと暮らし』 <http://www.mekongwatch.org/resource/publication/index.html>